



Title	質問3 : 「当事者の哲学」をきくことと哲学すること
Author(s)	桂ノ口, 結衣
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2021, 3, p. 99-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79255
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集 4

第1回 臨床哲学フォーラム（ふるいにかけられる声を聴く）

テーマ：非人間・暴力・対話：関係性をめぐって

【質問3】「当事者の哲学」をきくことと哲学すること

桂ノ口 結衣

ご発表（予稿）から、「当事者」の声は当事者自身のことを語るものであるとともに、内海に沈む『声なきもの』の声「なにか」を「語ろうとしている」「届けようとしている」もの（メッセンジャーとしての声）でもあるということを知り、声に出会い直せたような思いです。またその「届けようとしている」「なにか」の、ひとつの仕方での荷造り（「語りから思想を抽出し、普遍化していくこと」）であれば哲学者は手伝えるかもしれないという可能性について、今後もぜひ考えてみたいと感じました。

一方で、正直なところわたしは「当事者の哲学」にどう関われるだろうかとはたじろぎました。このたじろぎを、いまのところ2つに整理してみましたので、共有させていただければと思います。

- ①「哲学」という形であらわれていても、なお強い「語り」性へのたじろぎ
- ②「自然総体の代弁」へのたじろぎ

①「哲学」という形であらわれていても、なお強い「語り」性

わたしはこれまで、誰かが「哲学しようとしている」時間と「語ろうとしている」時間を自分なりに嗅ぎ分け、異なる態度で応じてきたのだと思います。今回の「当事者の哲学」については、「哲学」という形であらわれていても、なお強い「語り」性を感じて、関わり方が分からなくなったという面がありそうです。

概念的に「語り」と「哲学」を容易に切り分けられるとは思いませんが、直感的に誰かの語りに立ち会っていると感じる時と、誰かの哲学——それはいわゆる哲学書であったり、哲学カフェでの発言であったりしますが——に立ち会っていると感じる時とでは、異なる聞き方をしているように思います。前者と比べ後者では、いわゆる「批判的思考」を含め、自分の思考が動きはじめることを自制しないという傾向があります。

しかし、わたしは今回ご発表の「当事者の哲学」に対しては、決して哲学でないとみなしたのではないにもかかわらず、こうした「哲学」への思想的関わり方を直感的に躊躇しました。この躊躇は、「勝手に当事者の「なにか」を形にすることは、当事者を傷つける可能性も高い」というご指摘とつながっているかもしれません。つまり、「なにか」がひとたび哲

学という形になったからといって、哲学として関わること——たとえば「他の問題に取り組む人たち」のひとりとして『同じ構造がある』と考えることや、「具体的なエピソードから、もっと広い射程の問題へと話を広げていくこと」——もまた、当事者および当事者のいる内斜面を傷つける可能性があるのではないかという躊躇です。

そこでお伺いしてみたいと考えた質問は、

質問1：哲学という形をもった（形で抽出された）「当事者の言葉にならない『なにか』」と、どのように関わっておられますか／ゆかれますか？

質問1'：「当事者の語り」と「当事者の哲学」は、（何が）異なるのでしょうか？

質問2：「当事者の哲学」は誰（何）にとって明らかになるとよいのでしょうか？

・当事者の語りそのままでは伝わらないが、思想として抽出されたものであれば届く人に対して明らかになるだろうか（「外海にいる、傍観者やこのことを知らない人に届ける」）。そうであれば、語りそのまま迫る思いを抱いた人は、哲学という変形にはかえって触れないほうがいいのか。

・当事者が声を届けようとしたその宛先に対してよいのだろうか。宛先が不明瞭な場合には、どうすればよいだろうか。

・誰それにとって明らかに、というよりも、「人間の共同体」のなかにすでにあるその存在を照らし出しておくべきということだろうか（「川」）。

でした。

しかし実際に小松原さんの声によってお話を伺うなかで、「他の問題に取り組む人たち」のひとりとして『同じ構造がある』と考えることや、「具体的なエピソードから、もっと広い射程の問題へと話を広げていくこと」に対するわたしのイメージは大きく変わりました。わたしにははじめ、これらは、言うなれば「利用すること」の一種であるかのように感じられていたのですけれども、いまや「連帯すること」という響きのほうが、より大きく聞こえるようになりました。きいて・読んでそこから自分が「勝手に」考え始めるだけでなく、きいた・読んだ声と共に考える道もあるのだった、と思い直したような感じです。この更新された地点から、上記の問いについてはわたし自身も考えていこうと思います。

②「自然総体の代弁」へのたじろぎ

以下のもうひとつのたじろぎも、予稿を拝見した段階で言語化を試みたものです。こちらでも当日印象の変化があったため、それについては最後に触れます。

わたしは杉本さんや吉沢さんの「水俣病が起きた後の海、死んだ魚、しびれて動けない猫たち。または原発事故が起きた後の大地、汚染された牛、荒地となった野」の声を聞いていること、そしてその声を届けようとしているということについては、批判したい気持ちも、批判できるいわれももちません。わたしは、「当事者」が届けようとしてくれたものとしての声なき者の声を聞きたいし、聞いてしまった自分として生きていきたいと願います。

でも同時に、「当事者」であっても声なき者として「非・人間」の声を聞くことはできない、自分も含め当事者の声を聞く者たちは当事者の行為を「代弁」と思いなすべきではないだろう、とも思うのです。わたしは環世界の考え方が好きであるうえ、人間が基本的にそれほど好きではありません。そのため、あくまで人間の（時間・空間感覚を含む）知覚の枠組みや価値観による語りを、「水俣病が起きた後の海、死んだ魚、しびれて動けない猫たち。または原発事故が起きた後の大地、汚染された牛、荒地となった野」の[・]声として受容することにどうしても抵抗を感じます。「加害」や「被害」はそもそも人間の概念で、だから星にとって、海にとって、魚にとって、牛にとっては、汚染も死滅も破壊も、「被害」ではないかもしれない（参考資料：田中良尚「台風の猛威」、伊丹市昆虫館『いたこんニュース 16(2)』2019:4）。

それでも、だから気にしなくてかまわないと責任を放棄するのではなくて、人間にとって「加害」であることをしているから、人間にとっては「被害」として声が聞こえてしまうから、というのが、加害を止めていこうとする十分な理由になっているのではないかなと考えます。非・人間に「被害」[・]があり、その声になっていない「被害」を目の当たりにした「当事者」が伝える声をとおして人間の行う「加害」に向き合っていけるというよりも、非・人間にも「被害」[・]を見る「当事者」の声が、どうあがいても人間が聞き人間に届けようとする人間の声であるからこそ、その声を聞いた人間が、倫理として「加害」に向き合っていけるのかもしれないなど、わたしは考えておりました。

こうしたもやもやに関しては、当日ご発表を伺い、小松原さんのまなざしの向いている先は「当事者」なのだということを強く意識するにつれ、「代弁」として聞くことはできるが「代弁」と思いなすことはできないという、このたじろぎを抱えたまま読んで差し支えないご論考であったのだと感じました。この変化については、まだうまく言語化できていないため、今後の課題としたいと思います。

貴重なご発表に感謝いたします。